

人間形成の要因分析とその組織

加藤 秀男

教育における人間形成の操作技術は、

- 1、人間が形成せられつつある現実姿態を、具体的全体的に把握し、
- 2、そこに働いている形成要因を分析し、
- 3、この要因を望ましい体制に組み直すこと以外にはない。

人間形成とは、人間が、ある存在状態(P)から、他の存在状態(P₁)に変容されることである。人間形成の「要因」Factorとは、この変容を生起せしめているいくつかの力のそれぞれを指すのである。

要因分析の態度

人間形成の要因は無限である。FichteがDie Bestimmung des Menschenで述べている如く、「一粒の砂の存在にも」「無窮にわたる全過去、無窮にわたる全将来」がたたまこまれ、そのかすかな動きにも、これを動かしている限りない宇宙的因果関連があるからである。従つて要因のすべてを分析することは不可能である。この為に

- 1、人間形成の個々の断片を寄せ集めて全体を構成する態度を捨てねばならない。そしてそれとは反対に、人間形成の具体的全体的事象に直結して、その形成要因を析出する方法をとるべきである。

- 2、全体事態の分析も、限りなく続けられるであろう。それはどの段階まで分析されるべきであろうか。要因分析は人間形成の技術的操作

の一環として行われるべきものであつて、分析のための分析ではない。

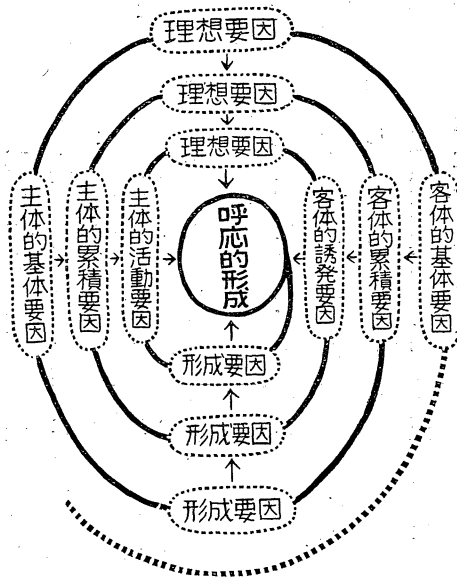
従つて分析は、教育的形成の技術操作に必要な限度に行われるべきである。従つて例えば、「教師の賞讃の言葉」「教師の与える賞品」などの如く、重要な形成力を持ち、技術的に処理し得る統一的な力の単位即ち形成力を發揮する統一単位の分析を中心として、その前後の分析が行われるべきである。これは「操作的限定」Operational Definitionといえる。

- 3、要因分析は構成要因、機能要因の両者を併せ考えるべきである。
- 4、全体事態はその構成要因に分析しつくさるべきものではない。そこには必ず割り切れない残余がある。全体として個々を結晶させている結晶要因が見失われるからである。要因分析及び要因組織において、常にこの全体的統一的な結晶要因がまつわることを忘れてはならない。

以上の立場に立つて、ここでは

- 一、人間の生きる現実具体の姿を「呼応的形成の力動進展」として把握し、これを
- 二、「主体的要因」と「客体的要因」とに分析し
- 三、主体的要因を更に

- 1、現実の活動を営む「主体的活動要因」と、
 - 2、その活動の成果が、主体的に累積沈澱せられ、然も活動要因を規定している「主体的累積要因」と、
 - 3、活動要因と累積要因の基盤となり、これを動かしている「主体の基体要因」に分析し
 - 四、客体的要因を更に
 - 1、現象的に主体を刺戟誘発する「客体的誘発要因」と、
 - 2、客体的誘発刺戟と主体的活動との成果として生み出され、客観的歴史的伝統的文化として累積された「客体的累積要因」と、
 - 3、刺戟誘発要因と文化要因を運載する「客体的基体要因」とに分析し、
 - 五、これらの諸要因を全体的統一的に、又、分析的に「理想要因」に照射し、
 - 六、これらの諸要因を統制整序し、又新たに組織し、意図的な人間形成を試みようとする「教育的形成要因」を分析しようとしたものである。
- これを図示すれば次の如くである。



【呼応的形成的構造】

横断的兩極性 縦断的層序	主体的	客体的
呼応的活動面	主体的活動要因	客体的誘発要因
呼応的累積層	主体的累積要因	客体的累積要因
呼応的基体	主体の基体要因	客体的基体要因

一、呼応的的形成

個々の人間がそれ自体として存在し、その個々として存在するものが、外的環境の影響下におかれて、種々の影響を受けると見るべきものではなくて、内外の連関そのものとして呼応的に形成されつつあるものそのものが個々の人間であると見るべきである。

呼応は主体と客体との関係である。主とは呼ぶ主体であり、客とは応える客体である。然し、主と客がそれ自体として存在して、互に呼応するのではなく、呼応によつて主客が生ずるのである。呼応一如は主客を生む根源である。

1、生物的生命の呼応的的形成

一箇の生命が「生れ出る」そのことが、宇宙的因果関連の所産であ

り、又生命が生命として生存すること自体がまた宇宙的因果関連の顯現そのものである。

J.S.Haldane 氏 Philosophical Basis of Biology において「生体の生命は、内的環境に依存すると同時に、究極において外的環境に依存する。例えば、酸素及び栄養の不断の供給がなければ、生命は維持されることはできない。然してその場合、生体の活動をもつて、外的環境の決定的原因と断することもできなければ、外的環境をもつて、生体活動の決定的原因とすることもできないことは内的環境の場合と何等異らないのである。生体と外的環境とは相互に連関したものであり、その連関の特異性が生命の正常的な一特徴なのである。即ち生命とは実に空間的な境界を持たないところの特異的な全体を形づくつてゐる自然なのである。我々の知覚する世界に空間的な限界が存しないのと全く同様に、一個の生物の生命にも、空間的な限界は存在しないのである。」と述べている。

一箇の肉體自体をそのものとして存在するかのように考えることは抽象である。生命が生々として保たれている事象そのものは、正に宇宙的諸要因の連関的形成そのものである。

2、行動の呼応的發現

人間の行動は一見、人間そのものから發現してゐるかの如くに考えられる。然し、人間の行動は主客呼応一如の場の底から發現するものであり、主客呼応一如の場が押し出し、形成しつゝあるものである。

Kurt Lewin 氏 A Dynamic Theory of Personality の中心

「事実、特殊な環境に言及することは、そして実に特殊な環境の集合

に言及することこそは、素質の概念にとつて欠くべからざることであり、一個人の素質や個人的特性は、ただ一つの特異な行動様式によつて決定されることができるとはならず、異つた環境場面が、その引き出した行動様式と関連競合せられるような行動様式の集合によつてのみ決定することができ。素質とその現在状況の両者に関して言えば、一個人の特性はその力動的問題の取扱ひにおいては、顯型的 Phenotypically に規定されるべきではなく、原型的 Genotypically に決定されるべきである。従つて全一の個人的特性でも、その行動における変容は極めて大きい。かくて Kramer は野獸のような行動をする子供が行儀正しくするような適切な環境におかれた時、その百パーセントがその野獸的行動を失つたことを見出してゐる。」「ある場面とある個人とよりなるところのある一定の全体的な星座から、ある一定の行動が結果する。即ち $(E, P_a) \rightarrow B_a$ 又は一般的に $B = f(PPE)$ とする心理的法則が成立するのである。」と述べている。

3、人間存在の呼応的形成性

その生命の現象も、その行動發現も、人間の全存在はすべて呼応一如の存在である。阿説示 Assaji が舍利弗に示したといわれる「縁起偈」は「諸法縁起。如來説」是因、彼法因縁尽、是大沙門説」といわれる。老死よりいかに出離するかという課題を解決するために徹に思惟した仏陀の真理は、この縁起説であつた。縁起とは、「縁りて起つてゐる」現象自体を示すものである。一切のものは独立固定の實在本体などと考えらるべきものではなく、無限の相関關係をなして相依相資によつて存在していることを意味しているのである。それは

一般的には「これがあるとき、彼があり、この生から彼が生じ、これがなくなるとき、彼がなく、この滅から彼が減する」という順観と逆観によつて示されるものである。かくて人事諸象を明らかに、すべてが「縁りて起つてゐる」条件を追究し遂に、「無我」、「空」の悟境に到達するものである。

神秀上座の「身はこれ菩提樹、心は明境台の如し、時々勤めて拭拭して、塵埃をひかしむることなかれ」という偈に対して、慧能禪師の「菩提もと樹なし、心鏡また台に非ず、本来無一物、何処にか塵埃あらん」という偈が選ばれたのも、主客呼応の力動進展そのものに人間の全存在がかけられたためである。

二、呼応的形成の特質

1、力動的形成……呼応的形成は「動そのもの」の中に示現される。生命は欠乏であり、不断の緊張による要求実現の過程である。無活動は死であり、停滞は根本悪である。

2、両極的形成……呼応的形成は必ずしも平安な流れではなく。激流があり、渦巻がある。呼応力動の流れの中に巖然として巨巖が横わるからである。主体に対立する客体があるからである。道元は「学道用心集」に「此の時知るべき事あり。謂わゆる、法、我を転じ、我、法を転するなり。我能く法を転するの時、我は強く法は弱し、法還つて我を転する時、法は強く我は弱し、仏法從來この両節あり。」と云う。呼応的形成の横断的両極性として、主体的要因と客体的要因を析出することができる。

3、累積的形成……主客呼応的形成は内的に外的にその活動痕跡を

残し、成果を累積していく。Eduard Spranger が示した如く、自我圏と対象層は相呼応し、その業績を累積していく。

4、循環的形成……形成累積された現実姿態が、ふみ台となり、相互に呼応循環する。働きかけつつ働きかけられ、働きかけられつつ働きかけ、作りつつ作られ、作られつつ作っていく。

5、拡大向上的形成……循環的形成的力動は悪循環によつて、いよいよ窮地に陥ち入ることもあるが、それだけに一層、よりよき安定を求めてその振幅を拡大し、高きを求めて向上しようとする。「一丈これを世界という、世界はこれ一丈なり、一尺これを世界とす、世界これ一尺なり」という道元の語は高い意味をもっているが、呼応力動の世界は次第に広められていくものであり、そしてそれは単なる流転ではなくよりよからんとする志向性に貫ぬかれる。物を生かし、人を生かし、自己を生かし、生かしつつ生かさされ、生かさされつつ生かし行く螺旋的向上にその究極の動向がある。

三、呼応的形成の分析

前述の如き呼応的形成の現相と特質とから、これを次の如く分析することができる。即ち、呼応的形成を横断して主体的要因と客体的要因とし、その各々を縦断して、呼応的活動面、呼応的累積層、呼応的基体層に分析し、更にこれらを上下に切断して、理想要因を析出することができる。

四、主体的基体要因

1、肉体自体……形による心

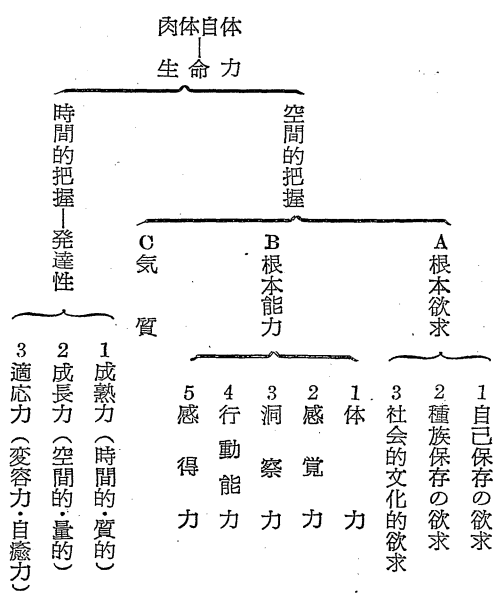
「才々(ほうふりむし)水中に有ては人をささず。蚊と交じて忽に人をさす。これ形に由るの心なり。鳥類畜類の上に心をつけて見よ、蛙は自然に蛇を恐る。蛙の形に生るれば、蛇を恐るるは形が直に心なる所なり。」と石田梅岩は「都鄙問答」で述べている。

宇宙的歴史的諸要因が結合して、既に人間としての形をとつてこの世に生れ出るということは、人間が「肉体自体」として形成されたことである。それはまことに宇宙的諸要因の呼応的形成の所産であるが、人間として結ばれた肉体自体は、生命を持ち欲望を持ち、考え感じ動く能力をもつものとして形成されたのである。

2、素朴の人間性

「色即是空と見れば大智を成じ、空即是色と見れば大悲を成ず」とは賢首大師の語として般若心経略疏の所載するところである。因縁所生の哲理よりすれば一切皆空である。然し因縁和合して存在する一箇の人間のいのちは正に慈悲愛惜の対象でなければならぬ。「骸骨の上を糞うて花見かな(鬼貫)」といわれる時、骸骨の人間は冷徹な科学的人間観察であり、花をめずる人間はあこがれを持ち、いのちをいとおしむ Primitive Humanity の所産である。Primitive Humanity も亦宇宙的諸要因の呼応的形成の所産であり、その現実存在もまた歴史的社会的諸要因の力動形成の場において、種々に変容せられるであろう。しかし人間としての結晶形態が破壊されない限り Primitive Humanity は力動の根源要因とならなければならない。それは、常に「疎外自己」を「人間の自然らしさ」にひきかえす力をもつものである。ここに社会機構による人間性可変の限界がある。

3、主体的基体要因は次の如く析出することができる。



4、これらの諸要因は、全体的にも部分的にも、その結合様相を異にし、それぞれ個性的特質を持つ。

5、基体要因は、その基体性の故に、環境的にも時間的にも、その変容が比較的困難である。

五、主体的累積要因

1、痕跡体系、沈澱累積層……主客呼応力動の成果は肉体自体に種々の痕跡を残し、沈澱累積されていく。例えば、母が繰り返かえして語りかけた言葉が、深い痕跡となり、かき消されない沈澱となつて内面化し、良心が形成されていくが如く、すべての経験の成果が累積されて、現実の人間の実体を形成し、その考え方、感じ方、行い方を規定

するのである。

古義堂の師父伊藤仁齋について、湯淺常山の文会雜記には「仁齋は何となく一所に居りたき人」とも「泰山の如くにてなかなか動かし難き人」とも又「學問にねりつめて徳をなしたる人」とも述べている。

涵養蘊蓄の深さがしのばれる。

2、沈澱累積の構成（空間性）

沈澱累積体系は (1) 習貫 (2) 習性 (3) 知識 (4) 技能 (5) 情操 (6) 態度 (7) 理想 によつて構成される。

3、沈澱累積の層序（深度）

(1) 表皮層……波立ててすぐにもあがりあげられるような表面的な沈澱層。例えば知識に即して言えば、Informatio 見聞の知、口耳四寸の學といわれるもの。

(2) 組織層……沈澱層が分化し、他の分化沈澱層との間に統一連関をもつに至つたもの。即ち一般化され類型化され組織化されたもの。知識によつて言えば Knowledge 体系知。

(3) 核心層……沈澱累積が内面化され、自我そのものとなり、自己の考え、自己の感情として表出されるに至るもの。知識についていえば wisdom 体験知、叡智、などといわれるものである。悟後の修行即ち「聖胎長養」によつて得られるものである。

4、沈澱累積の獲得的変容と自律的変容

沈澱累積は、活動要因による新経験の獲得によつて外から変容されていくと同時に、主体的内的基体要因による内的生命的成長力によつて内から変容されていく。例えば、異常な刺戟痕跡は水平化され、均

衡化され、或いは心情のリズムに従つて強調化されることもあるであろう。Allport の言う如く Functional Autonomy によつて Transcendent Experience も自ら癒やされる。

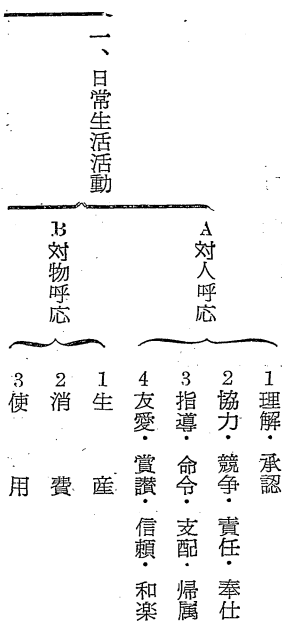
5、沈澱累積の経歴性

いかなる沈澱累積を続けてきたか、それはその人によつて、まさに運命そのものである。人間は全過去を背負つて明日の前に立たねばならない。全過去を背負つて明日に立つ力、それが Readiness 或いはより適切に Relevance といわれるものである。生得的基体要因と経験的累積要因との相乗積であり、今日現にかち得ている学習能力である。

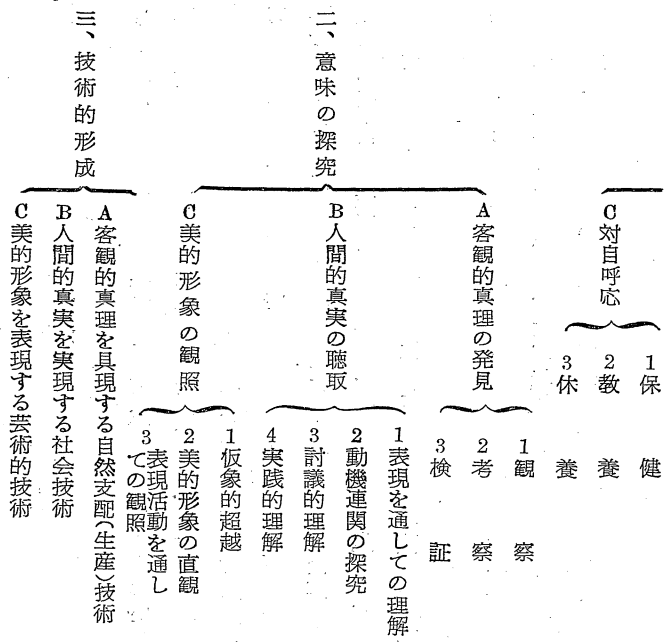
六、主体的活動要因

1、Mursell の Successful Teaching と Burton の The Guidance of Learning Activities にも引用されてる Mossman は Activity を八十三種に分析している。然しこれは形成技術的操作の立場から余りに煩雜に過ぎる。

2、主体的活動要因は大体次の如く析出される。



活動要因
の分析



3、日常生活活動も勿論、意味の探究とその技術的形成を含む。然しそれが無反省的に行われている。

4、本格的活動要因は、意味の探究とその技術的形成にある。前者は内的超越であり、後者は外的下降である。相まって作りつゝ作られ、生かしつゝ生かす呼応力動の契機をなす。

5、客観的真理は系列の意味として把握されるもので、この場合、呼応的一如性は「主観」と「客観」として析出される。

6、人間の真実は聴取の意味として把握されるもので、この場合、

呼応的一如性は「主体」と「客体」に析出される。
7、美的形象は象徴の意味として把握されるもので、この場合、呼応的一如性は「内」と「外」として析出される。

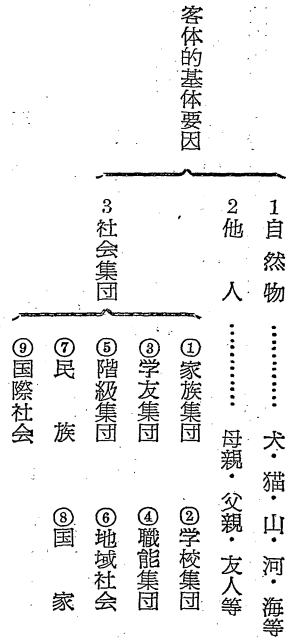
七、主体的自覚要因

人間は宇宙的因果必然の所産として形成されるものであり、そこには純粹の自己規定の意志はあり得ない。人間が自ら自己の意志を規定し得ると思うことは、あだかも投げられた石が自ら飛んでいると思ふ、磁石が自ら北方を指していると考えるに等しい。人のよく知る Schiller の「フレンシュタインの死」の詩句は「げに人の行為及び思想は海原の波の盲目的に動く如きものではない、内的の世界、その小宇宙こそはそれらのものの永遠に湧き出る深い谷である。それらのものは木に木の実がなる如く必然である、偶然なる手品師もそれを変えることはできない。」という。然し人間は「バラの木にバラの花咲く何事の不思議なけれど(北原白秋)」という感懐にふける。正に何事の不思議なき必然の世界であるが然し、何事の不思議なき世界も主体的ないのちの世界にとつては正に限りなき感懐をさそわれることである。すべてを自己一身に承当し、すべてを自己の主体的責任の中にかしこんで立ち上る処に何物にも屈しない偉力を發揮することが出来る。歴史的社会的諸要因の錯雑する刺戟誘発に翻弄されて、人は六窓一猿のあさましさをつづけるでもあろうが、然し一切を自己の内に吸収統一して自らの内から發するものとして自覚された時に一切をも焼きつくさんとする偉力を發揮する要因となる。古来、立志、責志と言われたが、自己反省、自己計画、自力遂行、自己評価、総じて主体的自覚の

人間形成的意義はこゝにある。

八、客体的基体要因

1、客体的基体要因は次の如く析出される。



2、自然物も宇宙的因果必然の所産として生み出されたものであり、それ自体の存在をもち、人間生活の基盤をなしている。

3、他人——他の人も、自己と全じく、宇宙的因果必然の所産として、呼応力動の場に形成されたものであり、自己と異なる呼応因果の系列の所産である。それは等しく人間としての共通性を持ちながらも異なる存在として、自己に要求を投げかけてくる。然も、生みの親、育ての親としての現実的連関をもつものは、その故に更に強くその要求期待を投げかける。

4、間接面接集団としての社会は、その手もとどかぬ「遠隔性」と、数えもきれぬ「多数性」と、長い歴史的な「伝統性」と自己を包む「包囲性」とをもつて、動かし難い巨体として強く個人を規定する力を持つてゐる。

九、客体的累積要因

1、主客呼応力動の成果は、社会的に累積され、社会的伝統文化を形成する。

2、そこには、子供にとつておもちゃがあり、人形があり、汽車があり、自動車がある。一般的に言語、慣習、経済、政治、道徳、科学芸術、宗教についての制度と機関と製作品がある。

3、それは例えば封建制度が、根強く伝わり人間の心性に動かし難い刻印を与える如き強力な形成力を發揮するものであるが、他面、現実的活動要因によつて不断に形成し直して行かれつゝある。

一〇、客体的誘発要因

1、客体的基体要因も累積的文化要因も、それが、現実的に子供の活動を誘発し、その活動の中に具体的に生きて動くまでは抽象的要因に過ぎない。

2、客体的誘発要因の主体に働きかける力の特徴は、(1)誘発性 (2)持続性 (3)同化性 (4)錯雑多様性にある。

3、誘発性……外はわれわれの行動を誘発する。それは単なる刺戟ではなく強要的性格をもつてせまつてくる。それは模倣を誘発し、探究を誘発し、人間的接触を誘発し、感銘を誘発する。

4、持続性……誘発刺戟が持続性を持つのは基体要因、累積要因の歴史性と伝統性に基つき容易に変容されない性格を持つからである。

5、同化性……客体要因はそれ自身の現実的構造と論理を持ち、一切のものを全じ構造と論理に同化しようとする。男らしい人、女らしい

い人とか、学生らしくないと言われる「らしい」とは社会的同化力のうち出したものである。日常生活における条件づけ、暗示、模倣、さらには、マスコムニケーションによる社会的同化力は強大なものがある。

6、錯雑多様性……客体要因はその数において、その規模において又その歴史的推移における段階点において多様である。一個人は家庭の一員であり、全時に学校の一員であり、全時に組合の一員であり、全時に地域社会の一員、民族の一員、国家の一員であるように、多数の集団に分属する。それらの集団の主張利害は相対し、そこから発する誘発刺戟線は或いは矛盾し或いは葛藤し、錯雑多様を示す。この誘発刺戟線の錯雑多様が主体的個を困惑せしめその自我の統一性を分裂せしめる。これに対する現実適応が場面適応のマスクであり、「心の分割」である。

十一、理想要因

1、理想は主客呼応力動の場から生れる。主客一如における力動性形成性、循環性、向上性が統一的、一如的に、螺旋的力動的向上を辿ることが、その活動自体に内在する理想である。力動をゆまざる進展、常に形成しつつその業績をふみこえていく創造、円融無礙、永遠の動的安定をうち出しつゝ、向上していく——呼応一如の進展は他を無視するのではなく自己を犠牲にするでもない。それは物を生かし、人を生かし、自己を生かし、生かしつつ生かされ、生かされつつ生かす力動進展そのものでなければならぬ。この一貫の理想から各要因のそれぞれについての理想が考察される。

2、主体的要因に即する理想は主体的統一と主体的自由にある。常

に人間らしい生き方を失わないこと、本来の人間性を失わないこと、人間性の自然らしさを失わないことである。主客呼応葛藤の場はいつの間にか人間性を失える人間に変容せしめるかもしれない。機械の如くに操られる人間が、いつの間にか歯車の一つになつていくかも知れない。それは物として疎外された人間である。生産用具となつた人間手間となつた人間、或いは大量殺人の用具となつた人間はいつまでもそれに堪えきれぬものではない。疎外自己はいつか自己本来の面目に立ち帰らなければならぬ。主客呼応のはげしい切り結びにおいて、又おびたしく沈澱された主体的客体的累積層を貫ぬいて、*Primitive e Humanity* がみずみずしくほばしつゝいなければならぬ。

3、客体的要因としての社会集団の理想は、その基体性を固定化させないことである。それは、ひとしく呼応力動の場で形成されたものであること及び、その多数性、遠隔性、巨大性の故に変容が困難であるが尙変容の可能性が大であることである。問題は主体的要因と客体的要因との理想の衝突の場合である。例えば個人の生命を国家のために捨てるかという如き場合である。この場合、個人はどの程度まで自己を変容し得るか、国家はどの程度まで自己を変容し得るかという変容の限界内において、共に生きる力動的安定を求めていかなければならない。個々のいのちが捨てられない理由は、その要因結合が人間の力で分割されないものである点にあり、国家の要求が変更されなければならない理由は、その要因結合が人間の力で多くの変容を可能とするからである。

4、理想要因は更に主体客体のそれぞれの累積要因、活動要因、誘

発要因について詳細な目標要因として決定されねばならぬ。

十二、教育的形成要因

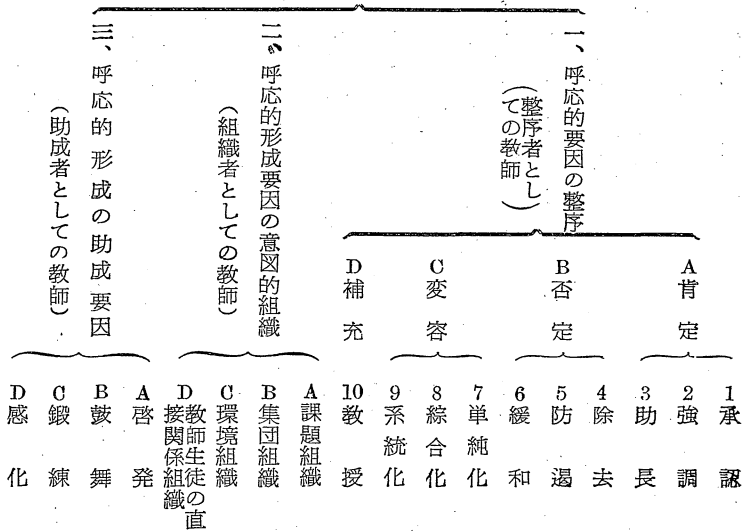
1、人間形成の現実的要因……人間の生命そのものが、人間の行動そのものが、否人間の全存在そのものが、呼応一如の力動場面において、無数の力動要因の結集として形成されつつあるのである。人間はこの宇宙的力動的形成の作用なくしては一日といえども存在することはできない。人間は日々形成されつつあるのである。

2、形成の理法……Kantはその「実践理性批判」において、「或る人の考え方の、それが内外の行為に現われる現われ方を深く洞察し、そのごく微細な動きや、更にそれに働きかける外部の機縁を、悉く知ることができたとすれば、その人の将来の行動は、日蝕や月蝕と全様に、確実に予測し得べきことを承認せねばならぬ」と述べている。すべてが、呼応一如の場において縁起しているとすれば、われわれは人間が何によつて動かされ、何によつて形成されているかを、ある程度までうかがい知ることができるであろう。

3、形成への意図的参加……形成の理法が知られ、何が動かされない要因であるか、何が動かせる要因であるかが明かとなれば、われわれは現実的人間形成の機構の中に、教育意図を挿入し要因を意図的に動かすことによつて、望ましい形成の道筋を辿らせることができる。

4、教育的形成要因は次の如く析出することはできる。

教育的形成動因
(教育愛の権化としての教師)



十三、教育的形成要因の整序……整序者としての教師

1、主客呼応の力動要因は、或は衝突し、或は矛盾し、或は強めあひ、或は弱めあひ錯雑紛糾する。望ましい人間像を形成するためにはこれらの諸要因を分析し、これを形成理想に照射して、整序しなければならぬ。

2、整序の観点は前表の如く十項目である。

3、整序の領域は、呼応力動の現実場面を出発点として、主体的活動要因、主体的累積要因、主体的基体要因、客体的誘発要因、客体的累積要因、客体的基体要因のすべてにわたるべきである。

要因の形成と整序の分析の呼応

主体的要因			整序の観点	客体的要因		
基体要因	累積要因	活動要因		誘発要因	累積要因	基体要因
			承認すべきもの			
			強調すべきもの			
			助長すべきもの			
			「……………」			

4、整序者としての教師は、現実の社会生活において営まれている形成機能を有力に活用する者でなければならぬ。

E.G-Olsen は School and community の「生活というものは、すべて教育的なものであるから、教育過程全体の中の学校の役割は、先ずもつてまとめ役であり剰余としての役割 (a coordinating and a residual one) であると述べている。

十四、教育的形成要因の組織……組織者としての教師

1、教育的形成はこの広汎な人間形成の要因を全体的に考察し、その整序と組織即ち再体制化として考えらるべきである。形成要因の整

序は断片的、個別的、機会的に行われることもあるが、更に積極的の意向的、具案的な形成組織が作り出されねばならない。

2、組織の核心は、いかにして主客呼応の力動進展を強力に螺旋的に向上させるかにある。全力發揮の体制をいかにして実現せしめるかにある。内的な力が発動し、外的誘発力と競合し、相対応し、漸次的に燃え上り、巨大な火柱の如くに強靱な上昇力をもたせることが形成組織の核心である。

3、このためには、全力動諸要因が目標を焦点として集中的統一的に一本化されなければならない。例えばランニングの場面で、生徒は全力をあげて走る。母親がこれを応援する。教師が応援する。友達が全員拳つて応援する。優勝には燦然たるカッツプがある。このような場で生徒はその力量の限界までを發揮することができる。もし条件が許されるならば、すべての教育場面がかゝる限界状況において生きる場面を示現し得るであろう。母親との愛情の結合体制があり、教師との信頼の結合体制があり、全学友との共励せつさの結合体制があり、全社会集団との期待の結合体制があり、更には神と共に生きる結合体制があるならば——即ち全力動要因が一点に集中統一されるならば、すべてを発火せしめる強烈な形成偉力が発現される。

4、群要因——要因結合の密度と大きさが有効組織の課題となる。

5、教育要因の組織は、かゝる全体的力動組織に立つて、主体的活動力を最大に発現させる活動組織と客体的誘発力を最大に発現させる誘発組織を考慮し、具体的には

(1) 課題解決場面の組織

(四) 人間関係を調整する集団組織

(イ) 物的社会的環境の調整組織

(二) 教師生徒の直接的な人格交渉の組織がつけられる。

6. こゝに組織者としての教師がある。J. I. Mursell は Successful Teaching の中で「私の見解によれば、教師は、専制者でもなく、学習グループの単なる一メンバーでもなく、その本質において、デレクター或いはガイドですらない。教師は組織者なのである。教師は健全な一般的原理に基礎づけられた組織の特殊な原則を適用することによつて、よい仕事をなしとげるのである」と述べている。

十五、呼応的形成……助成者としての教師

佐藤一斉はその「言志録」において、「誘掖して之を導くは教の常なり、警戒して之を諭すは教の時なり、躬に行うて之を率きいるは教の本なり、言わずして之を化するは教の神なり。抑えて之を揚げ、激して之を進ましむるは、教の権にして而して変なり。教も亦術多し。」と述べている。

呼応力動の場において教師が、主体的なるものに働きかける助成要因として、1、啓発 2、鼓舞 3、鍛練 4、感化 をあげることが出来る。

1、啓発は新しい世界に眼を開かせることである。見透せない場面に對する洞察力を与えることである。むすぼれたものを解きほぐして新しい意味関連を見出させることである。ここでは観点深化と観点変更の助成技術が要請される。

2、鼓舞は、かすかな発動をあおつて拡大発展させることである。

かすかな火が次第次第にあおられて巨火となるように、かすかにきざした興味、善意がす直に伸ばされ嬉々として拡大され深化されていく。承認、賞讃、讃嘆による鼓舞である。時には又、嚴肅偉大なるものに直面させることによつて人間の生命力を憤慨激発せしめることも必要である。孔子の「憤を發して食を忘る」の言を受けて、言志録は「憤を發して食を忘る、志氣かくの如し」と讃嘆し「憤の一字、これ進学の機関なり、舜何人ぞや、われ何人ぞや、まさにこれ憤。」と述べている。

3、鍛練は積極的には活動力を強化し、消極的には要求不満に對する忍耐度を高めることである。鍛練は力動の日常的均衡を破壊し、限界状況において生きることによつて限界度を高めていくことである。

「或いは拳も欠けなんとするほどに打ち」「或いは履をぬいで打ち」「恥かしめ」(正法眼蔵隨聞記) 或は「汝何ぞ年少をして軟弱の計をなさしむるか」(先達遺事)と叱罵しながら、古人はいかなる艱難にも堪える強靱な生命力を養つていつたものであつた。勿論、その現象形態は異ならねばならぬことは当然であるが、所謂自由が鍛練を逃避するものであるならば、それは強靱な生命力形成の原理とはなり得ない。

4、感化は心情のリズムの共感共鳴によつて自ら形成されることである。道元は如淨禪師にめぐりあわせれた感激を「まのあたり先師を見る、これ人に逢うなり」(正法眼蔵行持)と語っているが、まことに道元の言う如く、大いなる人格においては「威儀現成し、化機漏泄する」のである。

十六、教育的形成動因……教育愛の権化としての教師

教育的形成の諸要因を結集統一せしめる結晶要因は教育愛である。

道元は「正法眼蔵菩提薩埵四攝法」において、上求菩提下化衆生を事とする菩薩のあり方として、布施、愛語、利行、同事の四を説く。愛語について曰く「衆生をみるに、先ず慈愛の心を起し、顧愛の言語を施すなり。暴悪の言語なきなり。むかいて愛語をきくは、おもてをよるこばしめ、心を楽しくす。むかわずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に銘す。しるべし、愛語は愛心より起る。愛心は慈心を種心とせり。

愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり」と。道元には更に「正法眼蔵菩提心」に「菩提心を起すというは、おのれいまだわたらざる先に、一切衆生をわたさんと發願し、いとなむなり」「衆生を利益すというは、衆生をして、自未得度先度他のこゝろを起さしむるなり。」という語がある。教育要因の整序、組織、助成にはもとよりなみならぬ困難を伴う。我見、我執、我欲にとらわれる凡夫にこの葛藤を切り開く力は容易に握られるものではない。道元に次の激発の言葉がある。曰く「為他の志気を衝天せしむるなり、しかあるによりて自他を脱落するなり」と。(正法眼蔵自証三昧)

十七、呼応的形成における時間要因

形成変容は急激になされる場合もあり、漸次になされる場合もあるが、いずれにしても形成変容は刻々が絶対である。積み上げにしても掘り下げにしても、全じものの反復はあり得ない。刻々が絶対である。

正に「前後ありといえども、前後際断せり。」(道元)である。段階的

発達というも、現われるものが現われるためには事前の伏線の指導こそ大切である。碧巖録第十六則は「鏡清そつ啄の機をのべ」すなわち以ち自由自在にしてそつ啄の機を展べ、殺活の劍を用うべし」と述べている。内的に孵化するものと、外的助成は一如として働かなければ新しい生命の生々はあり得ない。それはただ母啄子そつの時機のみではない。刻々が呼応同時でなければならぬ。呼応同時であるためにはマカレンコのように如く、一挙に爆発的方法を用いることも必要であり又苗の根すくを待つために、或いは内的の醗酵醗酵を待つために、静かに機を待たねばならぬことも必要である。誘発、点火、昂揚、脱皮、練磨、習熟の手堅い過程を一つ一つの絶対行としてのし上げていき、学び得た後にこれを「枯らし」「聖胎長養」「悟後の修行」を積む時間をおくことも必要であろう。せつかちの誤りもあり、間抜け、拍子ぬけ、気合ぬけの誤りもあり、全要因を結集してこれを生動せしめる呼応力動の全機性は教育技術の至極でなければならぬ。